

# 追悼 國府理

加須屋 明子 (京都市立芸術大学美術学部教授)

衝撃的な知らせが飛び込んできたのは、2014年4月末。ちょうど青森の国際芸術センターでの個展『相対温室』<sup>1</sup>が無事にオープニングを迎えられたようで、これからゴールデンウィークに向けて様々なイベントも開催されるだろうし、新作も発表されているようなので、行けるとしたらいつかなとスケジュールを考えたり、國府さんおめでとうと喜んだりしている最中のことだった。驚いて、目を疑い、にわかには信じられず、一体どういうことなのか、誤報であってくれればと願いつつ情報を集めたが、わかったことはまさにその新作の中で、倒れている彼が発見され、病院に運ばれたが助からなかったということ。<sup>2</sup>信じられないという気持ちと動揺とで、滄沱として涙が止まらず、呆然と過ごした。1年が過ぎようとする現在でもまだ、どこかで彼が笑って制作を続けておられるような気がしてならない。あまりにも突然で唐突な事故だった。理不尽すぎて、未だに気持ちの落としどころが見つかっていない。人々の記憶の中に、そして何より残された作品に、アイデアノートに、彼の一部が息づいていると述べることはできるのだが、それにしてもそれらをいくら集めてきても、彼自身が再び目の前に現れるわけではなく、新作が発表されるわけでもない。少なくとも現世では。

若い才能が絶たれたことが惜しまれてならない。まさに、勢いに乗ってこれから、というタイミングであった。彼を慕う作家たちも多く、名実ともにこれからの日本現代美術を担う中核となるはずだった。人工的な機械と自然とを合体させ、その共生の未来の姿を探る作業は、少年の面影を残しながら制作と取り組む作者自身の姿とも重なり、メカニズムの硬質なイメージと、詩的な想像力との奇妙な合体によって、その魅力は高まっていた。近年とりわけ印象に残る仕事が各所で続いており、たとえば2010年のアートコートギャラリー(大阪)での個展では、パラボラアンテナに車輪がついて動く庭《Parabolic Garden》や、巨大な温室の中に定期的に表れる霧とその中で育つ植物《Typical Biosphere》、また機械と柔らかに芽吹く緑との対比が見事な《砂漠の庭 Desert Garden》など大作が並んだ。続いて2011年にはヴェネチアのPalazzo Fortunyにて開催された『TRA: Edge of Becoming』展にも國府は参加し、最上階に置かれた《Attic Garden(屋根裏の庭)》が歴史ある建物の中に静かに佇みつつ、人と機械、そして自然の共生や文明のあり方を

暗示するように、ひときわ存在感を放っていた。2012年のアートスペース虹(京都)の個展<sup>3</sup>で発表された《水中エンジン》では、水槽の中で稼働するエンジンが生き物のようにも思え、水の中で激しく動く様子に2011年3月11日に起きた東北地方大震災と大津波に押し流される様子が重なって見えた。2013年西宮市大谷記念美術館での個展<sup>4</sup>では、初期作品、近作から新作までを合わせて展示し、エネルギー問題、機械と人間との共生、生態系の維持やリサイクルといった現代社会が直面する問題と向き合い、位相を転換させ、既存の価値観の枠組みを覆すような展示を実現させた。今後私たちがどのような方向へ向かうのか、様々なテクノロジーを用いながら、作品において芸術的手法を用いつつ、國府が命をかけて取り組んできたテーマ、未来に向かう私たちのあり方をしっかりと受け止めたい。

『死を育てる』<sup>5</sup>という書籍がある。人の死という、冷たく動かしようのない、非情なものにさえ思える厳然たる事実に対して「育てる」という言葉を繋げる点で心に残り、國府氏の訃報に接して再読した。「死を育てる」とは、もともとは著名な免疫学者の多田富雄氏が大病を患い、死と向き合うことで見出した言葉だが、それはまた、残された者の役目を言い当てている。「死は生を育て、生は死を育てる」との言葉を心に刻みつつ、國府氏の作品たちと向き合っていてゆきたい。

1. 「國府理展 相対温室」青森公立大学国際芸術センター青森、2014年4月26日から。6月22日までの予定だったが、同年4月29日の事故を受けて30日に展覧会中止を発表。
2. 新作の温室(透明なアクリルの箱)の中で作動させていた軽自動車のエンジンの排気の仕組みがうまく作動していなかった可能性があり、一酸化炭素中毒の疑いとのこと。
3. 國府理展「水中エンジン」2012年5月22日(火)～6月3日(日)アートスペース虹(京都)
4. 「國府理 未来のいえ」2013年6月22日(土)～7月28日(日) 西宮市大谷記念美術館
5. 秋田巖、金山由美(編)『死を育てる』ナカニシヤ出版、2012 <http://www.nakanishiya.co.jp/book/b134954.html>